

植物学上より観たる三熊山の眞價

松 沢 重 太 郎

城趾三熊山の延長である三熊公園は唯風光明媚だとか眺望絶佳だとか御座なりの讃辞で片付けて仕舞うべき通り一遍の名勝地ではないので自分は往年植物学上の見地から此の地域の自然林が完全に保存せられている点に着眼し其後公園としての経営に着手せられた当時其愛護精神を一般に普及せしむべく登山路沿いの主なる樹木に名札を付ける事を懇懇しそれを実施させたのであつたがその効果の有無は暫く別問題として関係当局の不断の留意と努力とにより爾來全山の翠巒は依然として濃艶さを持続し来り四季折々に展開する林相の美観に親しむべく戦前までは休祭日などの登山者甚だ多く殊に遠く阪神方面より海水浴を兼ねての夥しい観光客を誘致していた事は世間周知の通りであるがその後凶らずも大戦の勃発となりその甜なるに及んでは防空壕用材として手頃の林木を随意に伐採して持ち去ることが非常時なるが故にとの口実の下に堂々と敢行されていたとのことで好ましからざる其前轍が禍をなし終戦後既に一カ年以上も経過したる今日に於ては専ら自家用燃料の資材とすべく益々猛烈に盗伐が続行された実情である。今回機会を得て現地を足踏み入れその滲瀟たる光景を一見するに當つて最初より此の公園の施設に若干の因縁を有する自分としては最早之を黙視するに忍びないので以下拙筆を促して植物分布学上の見地から三熊山の眞價を明かにし其保護救済が此際焦眉の急なる事を特に地元の有志諸君に訴えて共鳴を得たいと思ふのである。

三熊山に於ける木本植物(喬木、灌木の外藤本、竹本をも含めて177種)下線を引けるもの常磐木84種、その他は落葉木93種。

合 辨 花 類

- き く 科 コウヤボウキ、ナガバノコウヤボウキ
- すいかづら科 サンゴジユ、ハコネウツギ、スイカヅラ、ウグイスカグラ、ヤマウグイスカグラ、ガマズミ、コバノガマズミ
- あかね科 アリドオシ、クチナシ
- なす科 クロ
- くまつづら科 クサギ、ムラサキシキブ、ヤブムラサギ、オオムラサキシキブ
- きょうちくとう科 サカキカヅラ、タイカカヅラ
- ま ち ん 科 ホウライカヅラ
- もくせい科 ヒイラギ、ネズミモチ、イボタノキ、

- マルバオオタゴ
- えごのき科 エゴノキ、ケアサガラ
- はいのき科 ミミズバイ、クロバイ、カンザブロ
ウノキ、サワフタギ、ダンチサワフタギ
- か き 科 ヤマガキ、トキワガキ
- やぶこうじ科 マンリヨウ、ヤブコウジ、イズセンリヨウ、タイミンタチバナ
- しやくなげ科 シヤシヤンボ、アセビ、ネツキ、ヤマツツジ、モチツツジ、コバノミツバツツジ、ナツハゼ
- りょうぶ科 リョウブ
- 離 辨 花 類
- みずき科 アオキ、クマノミズキ、ヤマボウシ
- うこぎ科 ヤツデ、カクレミノ、タラノキ、ハリギリ、キヅタ
- ぐ み 科 ツルグミ、ナワシログミ、ナツグミ、アキグミ、アリマグミ
- じんちようげ科 コガンビ
- きぶし科 キブシ
- いいぎり科 クスドイダ、イイギリ
- つばき科 ヤブツバキ、サカキ、ヒサカキ、モクコク
- ほるとのき科 ホルトノキ
- くろうめもどき科 クマヤナギ
- あおかつら科 ヤマビロ
- か え で 科 オオモミジ、イロハモミジ、ウリハダカエデ、イタヤメイゲツ
- みつばうつぎ科 ゴンズイ
- にしきぎ科 マサキ、ツルマサキ、マユミ、コマユミ、ツルウメモドキ
- もちのき科 イヌツゲ、モチノキ、タラヨウ、ソヨゴ、クロガネモチ
- る る し 科 ヌルデ、ヤマハゼ、ヤマウルシ
- たかとうだい科 カンコノキ、アカメガシワ、ヒメユズリハ
- せんたん科 センダン
- さんしより科 フユザンショウ、サンショウ、イヌザンショウ、カラスザンショウ
- ま め 科 ネムノキ、マルバハギ、ヤマハギ、イヌエンジュ、ナツフジ、コマツナギ、ヤマフジ

いばら科	<u>リンボク</u> 、 <u>ビワ</u> 、 <u>カナメモチ</u> 、 <u>フユイチゴ</u> 、 <u>ホウロクイチゴ</u> 、 <u>キイチゴ</u> 、 <u>ニガイチゴ</u> 、 <u>シデザクラ</u> 、 <u>ヤマザクラ</u> 、 <u>ウラジロノキ</u> 、 <u>ケナシカマツカ</u> 、 <u>ノイバラ</u> 、 <u>ナワシロイチゴ</u> 、 <u>フジイバラ</u>
まんさく科	<u>イスノキ</u>
とべら科	<u>トベラ</u>
ゆきのした科	<u>ウツギ</u> 、 <u>マルバウツギ</u>
くすのき科	<u>クスノキ</u> 、 <u>タブノキ</u> 、 <u>シロダモ</u> 、 <u>カゴノキ</u> 、 <u>ヤブニツケイ</u>
もくれん科	<u>ビナンカヅラ</u> 、 <u>シキミ</u>
つづらふじ科	<u>アオツツラフジ</u>
あけび科	<u>アケビ</u> 、 <u>ミツバアケビ</u> 、 <u>ゴヨウアケビ</u> 、 <u>トキワアケビ</u>
くわ科	<u>イタビカヅラ</u> 、 <u>ヒメイタビ</u> 、 <u>オオイタビ</u> 、 <u>イヌビワ</u> 、 <u>オオバイヌビワ</u> 、 <u>コウソウ</u> 、 <u>カシノキ</u>
にれ科	<u>アキニレ</u> 、 <u>ムクノキ</u> 、 <u>エノキ</u>
ぶな科	<u>アラカシ</u> 、 <u>ウラジログシ</u> 、 <u>ウバメガシ</u> 、 <u>ツクバネガシ</u> 、 <u>スダジイ</u> 、 <u>ツブラジイ</u> 、 <u>クリ</u> 、 <u>コナラ</u> 、 <u>クヌギ</u>
かばのき科	<u>ハンノキ</u> 、 <u>イヌシデ</u> 、 <u>ヒメヤシヤブシ</u>
くるみ科	<u>ノブノキ</u>
やまもも科	<u>ヤマモモ</u>
やなぎ科	<u>ハコヤナギ</u> 、 <u>マルバヤナギ</u> 、 <u>キツネヤナギ</u> 、 <u>ネコヤナギ</u>
ちやらん科	<u>センリョウ</u>
こしより科	<u>フウトウカヅラ</u>
単子葉植物	
ゆり科	<u>サルトリイバラ</u>
たけ科	<u>メダケ</u> 、 <u>ヤダケ</u> 、 <u>ネザサ</u> 、 <u>ブンゴザサ</u> 、 <u>ハコネダケ</u> 、 <u>マダケ</u> 、 <u>シボチク</u>
裸子植物	
まつ科	<u>クロマツ</u> 、 <u>アカマツ</u> 、 <u>スギ</u> 、 <u>ヒノキ</u> 、 <u>モミ</u> 、 <u>ムロ</u>
いちい科	<u>イヌマキ</u> 、 <u>イヌガヤ</u>

三熊山自生の樹木は昭和の初め頃迄に自分の調査した所によると大要前記の如く多数の存在が認められたのである。元来日本は山地に自生せる樹木の種類の多きことに於て世界一の称があり、其数は約三百有余と宣言されているが地理的に見て僅かに一摺の岩塊にしか過ぎない狭い三熊山城一円だけで全日本の山地に於ける木本類の半数以上を優に独占しているのであるから此の一点のみを取り上げて見ても既に誇るに足るべ

き存在である事が首肯せらるるのである。而して其樹木の多種類が専ら東北に面した山麓地区一帯に亘りて密集繁茂し所謂大幹巨木が肩々相摩して鬱蒼風猶暗しの感ある光景であつて而も其密林をなせる樹木は暖帯林特有のツブラジイ、スダジイ、クスノキ、タブノキ、シロダモ、ヤブニツケイ、モチノキ、クロガネモチ、ヒメユズリハ、カゴノキ、カンザブrouノキ、ヤツデ、リンボク、ホルトノキ、タラヨウ、ヤマモモ、クロバイ、アラカシ、ウラジログシ、カクレミノ、サンゴジユ、ヤマビワ、ネズミモチ、ミミズバイ、タイミンタチバナ等の常緑闊葉樹が其大部分を占めていて此群落中にクマノミズキ、イヌシデ、イイギリ、イロハモミジ、カラスザンショウ、マルバヤナギ、ノブノキ、シデザクラ、ヤマハゼ、ムクノキ、エノキ等の落葉闊葉樹が相交錯して林立し其上にイヌマキ、モミ、ヒノキ、スギ等の針葉樹も適当に配合され斯くして三熊山特有の美的林相を構成しているのであるが前記暖帯的常緑闊葉樹中には三熊山が或は其北限地なるべしと推定されるものが相当あると思ふのである。

彼の三熊グラウンドに近く巉々として巨幹に攀登しているコシヨウ科のフウトウカヅラは現在の処、此処を北限と思つているがハイノキ科のカンザブrouノキは広田村鮎屋の滝清庵寺を囲る林叢に数幹を認めているのが恐らく北限なるべしとは自分の従来の考察であつたが今回図らずも三熊山麓に其大幹一株を発見したのであるから自然北限線が一步前進した事になつたのである。予てより三熊山頂近くの臨海面に其生育を確認して置いたトキワガキも此の地が北限なるべしと考えられるし先年千草の宮の滝附近で僅かに切株の縦一幹により其分布を明らかにしたイバラ科のバクチノキも或は又三熊山林叢中の何処かに潜在生育しているのではないかと推測されて来たのである。我等は植物分布学上の観点より這般の考察を重ねる毎に三熊公園の重要な一役をより以上高価に買つてやらねばならぬものと信ずるのである。

併て繰述の途中ながら茲に次の一項を挟んで三熊公園の評価の参考に供したいと思ふ。

それは大正の終り頃、内務省より天然記念物として指定された県下赤穂郡坂越港内に於ける生島の林相を構成せる樹木の種類に就いてである。当時該地を踏査研究せられた我等同志某君の発表によると常緑樹としてモチノキ、シロダモ、タブノキ、クスノキ、ヤブニツケイ、カゴノキ、トベラ、モクコク、ツバキ、サカキ、ヒサカキ、マサキ、イスノキ、アラカシ、シラカシ、シイノキ、カナメモチ、カクレミノ、ネズミモチ、ヒメユズリハ、シヤシヤンボ、クチナシ、ナンテン、シユロの24種があげられ其外に灌木及び蔓生植物とし

てセンリヨウ、アリドオシ、マンリヨウ、ヤブコウジ、タチバナ、イズセンリヨウ、ヤマハゼ、ハマモクコク、ツルグミ、キヅタ、オオツヅラフジ、イタビカヅラ、サネカヅラ、ムベの14種が示されているから前後相合せて本本植物は僅かに38種に過ぎないのである。而も指定の理由が該樹林が悉く天然生にして原始状態が比較的能く保存せられているのみならず常緑樹に富み植物区系が暖地性の特徴を示せる点であると声言しているが以上の材料を以て我三熊山公園の林相と彼此比較対照する時に何人と雖も其優劣の判断に躊躇せらるる者は無いであらうと思う。

さて話は元に戻るが三熊山樹林の下層にはアリドオシ、ヤブコウジ、マンリヨウ、センリヨウ、ヒトリシズカ、カンアオイ、カテンソウ、ミヤマウズラ、イチヤクソウ、アマチャヅル、ハイチゴザサ、ウベユリ、トネソウ、タニギキョウ、ササクサ、タマツリスダ、キクコウハダマ、ヒメガンクビソウ、テンナンショウウラシマソウ、ハチジヨウシダ、フモトシダ、ホソバカナワラビ、イワヤナギシダ、アマクサシダ、イワガネソウ、イシカグマ等の如き山地特有の陰地性小灌木類、草本類、羊歯類が随所に適応した發育を遂げているのであるがこれら地域に聳ゆる闊葉樹類が今日の如く濫伐の斧鉞を免れざるに於ては彼等陰地的小植物の運命は実に風前の燈火に均しと危まれるのであるがそれにも増して自分の深處に堪えないのは斯る陰翳地の樹皮や岩肌に其發育を擅にしている菌類や地衣類の世界的稀品の将来に就てである。依而是より其実相を詳述して大方の深甚なる関心を求めたいと思う。

三熊山で採集して名称の明らかとなつた菌類 233種その内17種が新発見として学界に発表せられたものである。

三熊山で採集して名称の明らかとなつた地衣類65種その内4種が新発見として学界に発表せられたものである。

初めて三熊山で発見した新種で其後世界の何処にも今尙その産地の現われない菌類 6種

ミダレホウロクタケ、アワビタケ（是は其後瓜哇にも産する事が知られた）ヒダホコリタケ、ヤスリタケ（*Coniophoria Matsuzawae*, Yasuda 学名に松沢姓を用いたり）

ウズラアミタケ、シロオウギタケ。

初め外国で発見せられた新種であるが日本には三熊山以外他に其産地あるを聞かない菌類 8種

ヒメモジタケ、サビカワタケ、ラシヤタケ、コアナタケ、カベタケ、カワタケ、ナメシコウヤクタケ、ヤケイロコウヤクタケ。

初めて三熊山で発見した新種であるが其後日本で淡

路以外になお 1、2 の産地の知れた菌類 11種

ニクコウヤクタケ、シイノサルノコシカケ、ヒラフスベ、タバコウスバタケ、ガマタケ、シツクイタケ、アズマコウヤクタケ、ツチウロコタケ、ハゲカワラタケ、コゴメウスバタケ、コガネウスバタケ。

初め外国で発見された新種で日本では三熊山以外にもなお 1、2 産地の発表せられた菌類 19種

タイシヤコブタケ、オニカワウソタケ、ニクカワタケ、チャアナタケ、ナメシカワタケ、ニクアナタケ、チテイロコウヤクタケ、ウスキアナタケ、アメウロコタケ、モエギビヨウタケ、ホシゲタケ、キハリタケ、シロヒメカイメンタケ、キツネカワラタケ、キコモバタケ、ヘビアマミタケ、ヒメシツクイタケ、シロアマミタケ、キシワタケ。

三熊山で初めて発見した地衣類の新種でその後他に産地あるを聞かないもの 4種

アワジサネゴケモドキ、ゴマシオサネゴケ、ヒメチヤガマゴケ、ホソカラタチゴケ。

以上大正5年より同12年迄の7カ年間に亘り公務の隙を窺い、自分が或は山嶺の石垣に攀じ、或は屋尙闌き林叢を掻き分けなどして発見採集した菌類や地衣類の総数は実に 680余種に上るが、其内の約半数は今尙学界の研究未済に属するものであるから茲には既に名称の明かとなつたものの内世界には三熊山に唯一点のみと言う稀品や既に海外には存在すれども日本には三熊山に産するのみとか、若しくは三熊山以外にも尙 1、2 の産地が現われたと云う如き珍種を主眼としたる学問上興味あるものの名称のみを列挙して見たに過ぎないが、是等貴重品の発生が常に緑蔭の消長に左右せらるるものであることは既述陰地的なる小灌木や草本類の場合と機を同じうすることを又重ねて強調して置きたい。

さて三熊山は顕花植物に於ても菌類や地衣類に於ても一方には温帯的の種類を北地より若干南進せしめ置き一方には暖帯性否熱帯性の品種までも相当に北進せしめていることが明かになつていたのである。

例えばキシワタケやヘビアマミタケが共にシベリアの発見であるのに三熊山にも産出しているし、アメウロコタケが印度錫蘭島のものでありニクカワタケは南米及びフィリピン並に濠洲に発見されたものであるのに両者共に奇しくも三熊山中に発生していたし、三熊山での新発見アワビタケがその後瓜哇にも産出することが報告された等何れも分布学上の一資料として取上げらるべきものである。斯くの如くにして我が淡路の一公園三熊山の名は菌類や地衣類の著名な産地として、斯界専門学者間の記憶から永久に失われないであらう。以上は甚だ蕪雑なる記事ではあるが斯る重要さ

を帯びたる地域の樹木を擅に伐採し去りて学問上国宝的なる品種をむざむざ滅亡せしむることにあまりにも無關心なる方面に対し、其反省を促すべく警告を發し、以て公園愛護の輿論を喚起せしめんとの念願から斯くも大声を疾呼したる次第である。それで茲に筆を擱くに当り極めて最近に其实証を握りたる稀品消失の一事例を提供して本稿の結びの糸としたい。洲本税務署裏手よりの登山口坂路にかかる地点の左手路傍に孤立していたタカトウダイ科アカマガシワの樹皮に点々緑褐色の斑紋を以て着生していた地衣類で発見当時ヒメチャガマゴケなる和名を与えられた一新種は目通り径5寸以上もあつた前述寄主の一幹が、既に野荒し誰氏かの捺刀の危にかかつていたので、四近には最早該地衣の片鱗だにも残されていなかつたことは勿論である。されば彼れにとりて広い世界に唯一樹をのみと云う果敢ない手縁は茲に見事に覆えされ日本三熊山下の一角に主客相擁して哀れ其運命を共にしたと云う

丹波植物三珍品

この度丹波の三珍品を選定いたしましたので御紹介いたします。

1. ホシゴウソウ *Sciaphila japonica* Makino 明治35年牧野先生が伊勢本郷の植物に命名なさつた事は有名です。丹波多紀郡福住村の杉林の中に毎年夏期群生するもので、5 cm 程の紫色、無葉の多年生の腐生植物です。
2. キョズミウツボ *Phacellanthus tubiflorus* Sieb. et Zucc. 昨年7月3日多紀郡城南村の檜林の中で採集しました。無葉の黄白色の活物寄生植物で15cm 内外で群生す。寄主はアオキか不明ですがギンリョウソウに近いものです。
3. トケンラン *Cremastra unguiculata* Finet. 多紀郡大宇村の杜叢の中にありサイハイランに似ているが花卉に杜鵑の斑点がある。北地に産するようです。以上 (樋口繁一)

(p. 227 から)

かなり産する筈である。(略)

5. アサギマダラ *Caduga tytia nipponica*

MOORE, 1883

秋の頃山麓や登山路でよく見かける。独特な飛び方で針葉樹林の間を行く姿は優しく美しい。緩慢だが危険を感じると、急に高く舞い昇つて、とても捕えられない。曾て小林平一氏は10分間に約25頭を見たと言われたが、確かにこの山には多いようである。

(1953, 8, 20)

悲劇物に終つた訳である。呵々。1945, 12, 15.

(室井云) 松沢先生は去る昭和24年7月16日、74才の御高令で洲本市で亡くられました。翌年の秋に洲本中学(現洲本高校)の卒業生を中心に故先生の最もゆかりの深い三熊山の中腹に遺徳をたたえて記念碑が建ちました。

碑文には

表 松沢重太郎先生碑

先生は三熊山を好愛して一木一石を明にし特に草本菌苔に新種多敷を発見して学界へ贈り国立公園編入の素任を樹てた。この山の知名になつたのは景観美にも増して植物の宝庫として知られたためである。昭和25年秋彼岸先生の遺徳を慕う人々によりこの碑が出来た

裏 昭和二十四年七月十六日没

享年七十四

新刊紹介 学校園の經營と校外指導

B 6版 224頁、写真、図版80葉、中教出版發行
定価240円(〒24円)

室井 紳、岡村はた共著

本書は児童、生徒に直接、接しながら、科学教育のために鋭い観察眼を働かせている著者が、現実に動いている生活現象や、其の他の自然現象を対象とする理科教育にとって主要な場である学校園及び校外指導について指導者側の立場から、その經營の方法や、四季の条件を含めての動、植物の観察のしかたや、習性を知る実験方法等に関し、指導上の諸注意を手近な生物を例にとつて説いたものであります。特に、精密なしかも要領をえた挿図と、その説明とは本書の最も特色とする所であり、豊富な経験を積まれた著者にして始めてなし得る所と信じます。今後、本書が理科教育担当者に多大の便宜を与え且つ自然観察を通して理解をすすめてゆく現時の理科教育に対し、充分その役割を果すものと信じ且つ期待しております。

主な内容

1. 学校園
学校園の目的、学校園の植物、学校園の動物、学校園に飼育栽培しない方がよいもの。
2. 自然観察を中心とした校外指導
校外指導のあり方、郷土の自然観察表をつくる、校外指導の準備、校外指導の教具、指導者のための自然観察の要点。
3. 子どもに親しまれる遊び
玩具になる生物、子どもの親しむ植物(笛つくり、水車遊び、ノビルの車、花かご、シャボン玉のつくれる草木、各季節に山野で生食できる果実等60余種)、子どもの親しむ動物(飛行機手ミズムシ、背泳するコマツモムシ、その他)

神戸大学・理学部教授 広瀬弘幸